

ネイチャーセンターとは？

自然公園などの保全地域に、ビジターセンター、自然観察センター、ネイチャーセンターなど様々な名称で拠点施設がつけられることがある。ここではそれらを総称して「ネイチャーセンター」と呼ぶことにする。ネイチャーセンターを訪れた人は、展示で地域の自然の成り立ちを学んだり、季節の見どころの情報を得て自然解説やハイキングの参考になり、専門スタッフによるガイドツアーや講演会などに参加して理解を深めることができる。地域の自然環境に関する情報収集や提供、フィールドの保全や管理、そして来訪者や地域住民を対象にした教育普及である「インタープリテーション」が、ネイチャーセンターに備わる基本機能だといえることができる。

源流は自然公園のビジターセンター

ネイチャーセンターはいつ頃からつくられるようになったのだろうか。国立公園の制度が発祥したアメリカでは1960年代に、それまでであった展示中心の施設「公園博物館」に代わり、案内や教育普及など多面的な機能を持つ公園施設として、ビジターセンターが急速に普及した。ビジターセンターは日本の自然公園にもすぐに導入され、1960年代には複数のビジターセンターが作られている。これが日本のネイチャーセンターの源流の一つであろう。ただ、当時の日本のビジターセンターは博物館展示が中心であり、ほとんどの場合は保全や教育普及活動を行なう専門職員が配置されていなかった。

30年を振り返って①

日本のネイチャーセンターの歴史と意義、今後の展望

文／古瀬浩史（帝京科学大学教授）

自然系施設での環境教育の実践と研究を続けている

自然観察の森へようこそ！



2016年



現在の同センター。30年が経過し、周囲の森が再生している
地上140mよりドローン撮影：ネイチャーシネプロ 吉田嗣郎

1986年



開園直後の、横浜自然観察の森の自然観察センター
周辺。先行して進められていた民間の開発計画により、
樹木が伐採されていた

80年代初頭に第1号「ウトナイ湖サンクチュアリ」が誕生

国立公園のビジターセンターとは異なる系譜のネイチャーセンターの萌芽が1970年代中頃にみられた。行徳野鳥観察舎（千葉県）や弥富野鳥園（愛知県）をはじめとする、市民による自然保護運動の帰結として作られたネイチャーセンターである。

1981年には日本野鳥の会によるサンクチュアリ事業の第1号地として「ウトナイ湖サンクチュアリ（北海道）」が開設された。多くのボランティアの協力によって作られたウトナイ湖のネイチャーセンターには、保全活動のコーディネートや教育普及を担当する「レンジャー」が配置され、名実ともに本格的なネイチャーセンターとしての活動がスタートした。この頃の様子は、当時のレンジャーによって書かれた書籍『ウトナイ湖サンクチュアリ物語』（ひくまの出版）に記録されている。

1982年には東京都高尾ビジターセンターに常勤の解説員として財団法人日本自然保護協会（当時）の職員が配置された。これを皮切りに国立公園のビジターセンターにおいても、インタープリテーションの取り組みが本格化していった。

横浜自然観察の森が示したモデル

横浜自然観察の森は、そのような時代の中、1986年にオープンを迎えている。自然観察の森の特徴として、施設の整備と常駐の自然観察指導員やボランティアによる観察指導が一体的に計画されたこと、また、都市近郊の緑地に設定されたことが挙げられよう。国立公園等のビジターセンターではたいていの場合、展示が古くなる

までは積極的な更新を想定しない常設的な展示が作られるのに対し、自然観察の森では常設展示は小規模なものにとどまり、カウンターでの情報提供や手作り展示など、職員による運営が重視されるケースも見られた。都市近郊の立地を活かした市民協働や、地域住民を対象にした環境教育も先進的であった。

筆者は1988年頃、初めて横浜自然観察の森を訪問したが、開園からそれほど時間を経過していないにもかかわらず、年間80回を超える多くの行事が行なわれていることや、ボランティアの活動が活発だったことにとっても驚かされた。環境庁(当時)の補助事業の条件として、専門職員の配置が重視されたことも大きい。

ネイチャーセンターに教育普及を担当する専門職員がいるということは、現在では当たり前になりつつあるが、当時はそうではなかった。横浜自然観察の森は、ネイチャーセンターが担う保全、調査、教育普及といった基本的な役割や、市民協働による運営などの点で、以降のネイチャーセンターにモデルを示したと言えるだろう。

ネイチャーセンターの抱える課題

本稿の最後に、ネイチャーセンターの現在と将来について私見を述べたい。

現在のネイチャーセンターを取り巻く状況はどうであろう。私には、あまりよい状況とは言えないように感じられる。設立から年数が経ち、耐震性などの課題がでてきた施設の中には閉鎖されてしまう例がみられる。あるいは、ネイチャーセンターが持つべき機能が失われ、他の用途に転用されている例もある。指定管理者制度の導入に伴うコスト競争等により、職員の人件費が十分に確保されないケースもあり、非正規雇用で運営されている

さまざまな情報提供と環境教育



小学生向けの水生生物の観察。レンジャーによる自然解説(インタープリテーション)は、自然観察の森の重要な役割の一つ



園内のところどころには、来園者が自然観察を深めるための解説板が設置されている



横浜自然観察の森の自然観察センター内。季節の変化に合わせた手作りの展示で、タイムリーな情報提供を行なっている

「小さなネイチャーセンター」構想へ

センターも少なくない。ネイチャーセンターについての社会的な認知はまだ十分ではないように思える。設置主体である行政関係者には数値化しにくいネイチャーセンターの重要性を再度評価していただきたいと願う。「取り巻く状況」はネイチャーセンターの関係者の努力だけでは変えられない場合も多いものの、主体的に変えていくこともあろう。気候変動や生物多様性の保全など新たに顕在化してきた課題に積極的にアプローチして役割を果たしていくこと、また、獣害対策や観光による地域振興など、地域密着の課題に関わっていくことなどが求められる。ネイチャーセンター間の交流や協働も課題としてあげたい。自治体、NGO、企業など設置主体や運営主体がばらばらである日本のネイチャーセンターは、ネットワークが弱い面がある。センター間の連携は今後の課題になるのではないだろうか。

ネイチャーセンターは、自然公園行政、あるいはNGOによる環境保全運動、自然系の環境教育活動等を具体的かつわかりやすい形で体现した場であると言える。未来に向かって役割が小さくなるとは考えられない。私はむしろ、地域の自然情報の収集や提供といった機能を持つ「小さなネイチャーセンター」がたくさんできることを想定したい。それは、必ずしも新設の自然公園施設でなくてもよいと思う。都市公園のビオトープと連動したものや、学校や青少年教育施設の空き教室であったり、ホテルや観光案内所、あるいは商業施設や公共施設の一角でも構わない。自然観察の森のネイチャーセンターは、そのような「小さなネイチャーセンター」の模範的なモデルとしての役割を担っていくべきだと考える。